

古代深津市の織に遊ぶ



簡陽史探訪の会

神本光明・山口龍之

平成7年12月3日(日)

【 蔵 王 山 】

蔵王山は標高226mで、東側の最高峰を蔵王ヶ峯といい、かつて陸軍の測量台が置かれていた。

真中の峯を阿弥陀ヶ峯（別名龍王山）といい、山頂にはかつて医王寺があったが、焼失し現在地に移された。

現在山頂には八大龍王社（別名高麗神社）があり、昔から旱魃の際には必ず雨ごいを祈願したといわれており、小さな器にたまった雨水をイボにつけると治るといわれている。

また、阿弥陀ヶ峯の下には『光り岩』があり、水に濡れ月の光があたれば著しく光輝いたといわれている。

西方の峯を炭焼ヶ鼻という。





深津湾

手城、引野、深津、蔵王、吾
 曰は、今から三百七十年前まで
 は大きく灣入した入道でした。
 一帯に広がるこの大きな灣は、
 深津と呼ばれ、奥深く船が入る
 ことができたことからこう呼ば
 れました。
 当時、蔵王は市村と呼ばれ、
 市村には、宮の前の八幡神社の
 前まで船が入り、この一帯随一
 の港を形成していました。

古代の市村

市村の土地にはじめて私達の祖先が足跡を印し、住居を構えたのはいつの頃であつたかは、本村からは未だ確かな証拠が発見されていないが、数千年前、農耕文化の渡来しない専ら山に獣を追ひ、海に漁などをしていた原始時代、この付近は深く海水がはいり込んで現在の平野は、全て海底に没し、わずかに山裾の海岸に人々の居住を許していたようで、彼等の居住の跡は、東部では隣の村の大津野村大門、西部では福山市木之庄の二ヶ所は、今に当時の住居の食物の捨て場所としての貝塚をとどめています。

この貝塚の出土遺物を研究してみると、いづれも縄文文化の中期から後期にかけてのもので、大規模な遺跡である以上海岸づたいに行き来もしていたであらうし、きっと将来に市村の山裾から発見されると考えられます。当時の文化圏を考へてみると、備後の中心は、福山湾と松永湾にあつた様子で、貝塚の分布も一番多くこの沿岸に分布しています。

市村で発見される一番古い遺跡と遺物は、弥生文化期のものです。

この弥生文化とは、前の縄文文化期の終幕に大陸より農耕文化を伝えて、日本にも水稲を植えて人々は定着するようになりす。

この頃は、水田を求めて私達の祖先は、当時芦田川や高屋川、加茂川等の河川によって流出した土砂による三角州の発達により、神辺平野は相当埋まっていましたので、水と土地を求めた人々は、この新しい平野の周辺へ集まってきました。

この人々達は、今までの縄文土器の使用から一段進歩した弥生式土器と呼ばれる赤い須焼が焼かれ、又、金属器特に青銅器・鉄器が製作されて、社会も革命的な進歩をみせて部落も形成され、そうした部落が段々と政治的な統一が行われて部落国家をつくり、首長的な存在も出来たのです。

この時期が、我国の大和朝廷の発生時で、大体西暦紀元前後に相当します。

【弥陀八幡社】

神功皇后・応神天皇・武内宿弥を祭っており、本殿は1711年の建立、常夜燈は1858年に建てられた。

昔は海蔵寺の鎮守神であったが、海蔵寺の廃絶後は弥陀八幡社と称して、村の鎮守神として祭ったといわれている。

主神は仏体であったが、1887（明治20）年の神仏混淆が禁止されてからは、本尊を医王寺に移し、神鏡をもって神体とした。

なお『備陽六郡誌』には、水野家繁栄の頃、六郎太夫という人が海蔵寺の寺号をたやさぬ為に、永雲寺の封山和尚を開祖として『海蔵庵』という永雲寺の末寺を開いたとの記述が見られるが、現在では全く残っていない。

蔵王八幡神社



本殿三間・四間一棟	拝殿一棟
神四座一棟	隨身門一棟一間・三間
石平洗井	一册
石夜燈	一対
石杓	一対
石常夜燈	一対
全	一蓋
石大鳥居	一ツ
石杭連柱	一対
石階段	

享永七年寅八月建之
 当村山之嶺土屋氏寄附
 文化二年十二月土屋半左右門外氏子中
 明治三年八月佐藤重四郎寄進
 明治十年五月広島県藤井源太郎寄進
 安政五年八月土屋浦平外惣氏子建之
 明治三年建之
 宣曆九年八月建之
 明治十六年一月佐藤久兵衛寄進
 宣曆十一年六月佐藤子蔵寄進



田火跡 宮の前焼寺跡

奈良

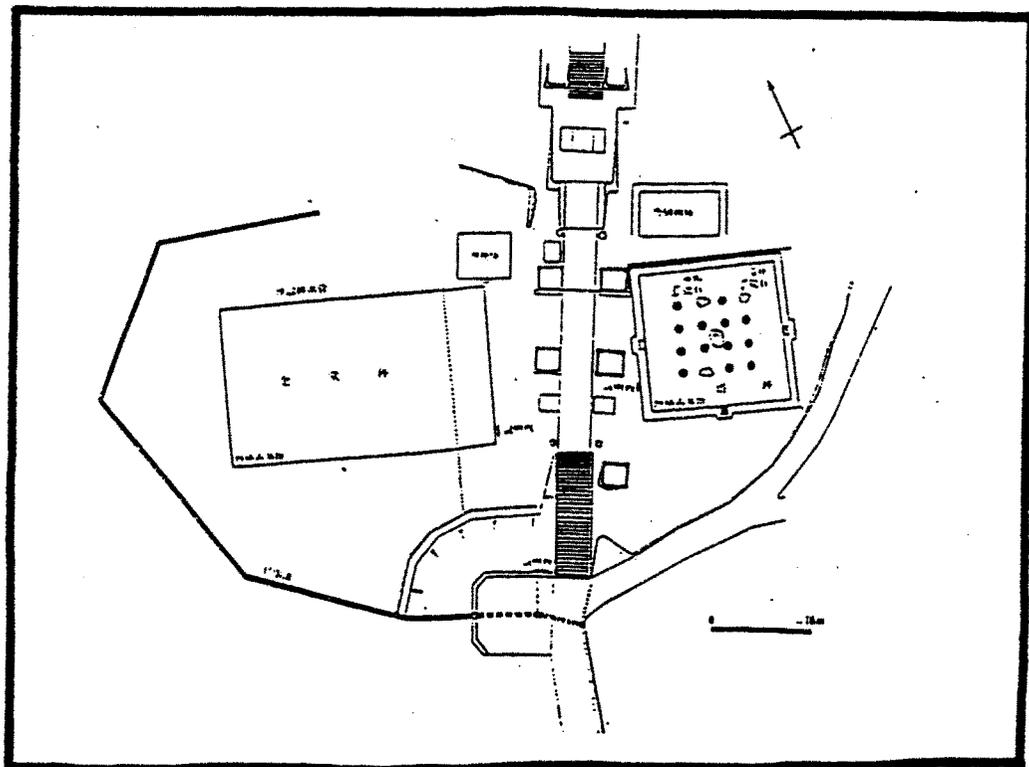
時代には、この八幡神社の位置に酒蔵寺という、法起寺方式の寺があったことがわかっていませう。昭和五年の早稲田大学西村則士による発掘では、塔の中心礎石が発見され、昭和五十一年には全面発掘が行なわれ、現在田の史跡として整備されています。

この廃酒蔵寺について、「住吉酒蔵寺」という寺あり。当村の生土八幡は、酒蔵寺の鎮守たりしとぞ。則酒蔵寺廃跡は八幡の境内にありて、尙今に残れり」と備陽六郡志にありませう。また、「水野家繁栄の時、六郎太夫という人が福山家對寺封山和尚を爾祖として一庵を建て、酒蔵寺と名づけ。酒蔵寺という寺号を失わざるためなり」とありませう。後年、この家對寺の住職が、この酒蔵寺のある宮の地の木を村の氏子が伐つたことに腹を立て、庄屋役人にこのことについて題口した時、この庄屋が、

「この山の木は氏神のもので、酒蔵寺の木は一本もなく、すべてが神社の木であると藩の寺社方の記録にあるではないか」と住職の申し出に反論したことも記されています。

この地に酒蔵寺がはじめて建立されたのは、発掘調査の結果奈良時代といわれています。調査は、昭和五年早稲田大学西村真次氏によつてはじめて行なわれ、次いで昭和二十五、二十六年広島県史蹟調査委員会、昭和四十一年県教育委員会、昭和五十一年には環境整備事業として神社の御奥御移転に伴つて跡地などが調査整備され、現在田史跡として指定されています。発掘調査からは、奈良時代前期末から後期の瓦や明仏(瓦に焼いた仏)、「紀臣石文」をはじめとする人名をへら描きした文字瓦が出土しています。

現在、殿王八幡神社に「く宮の参道を登ると、右側に跡跡、左側に金堂跡を見る」ことが出来ます。





三輪八幡神在下に残る
三輪寺の塔の中心礎石

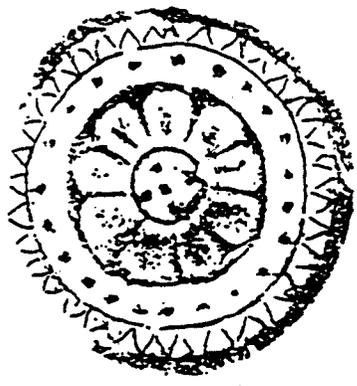
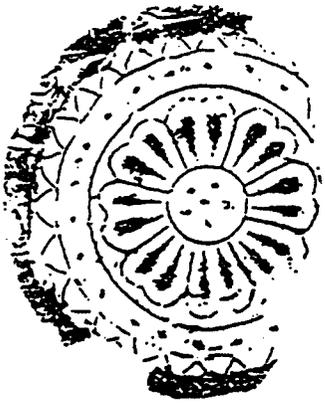
宮の前
廢寺





出土文字瓦拓影

塔跡出土新瓦



深津市

市村の歴史において、第一に気をこめるべきものは深津市である。

何と云へば、深津市こそ村名の起りであり、かつ市村が随分早く開けたことを立証するものがあるからである。即ち、市村という言葉は、深津市の市から来ているのであって、しかもこの市は、全国的に有名なものであり、又この市場と近頃有名になった海蔵寺とが密接な関係にあった事などを思うからである。

深津とは、深く湾入した海湾の奥にある船着場の意味であって、この名は、随分古くからあった。かの万葉集にも

路後 深津嶋山 誓 若目 不見 言有 (みちのしり ふかつしまやま しましくも きみがめ みずば
くるしかりけり) という歌がある。

この深津嶋山とは、深津の蛇山のような丘陵地帯をいうのではなく、奥にわが郷土の名山或三山を中心とする前後左右の山々を総称していったもので、蛇山もその一部であると思う。

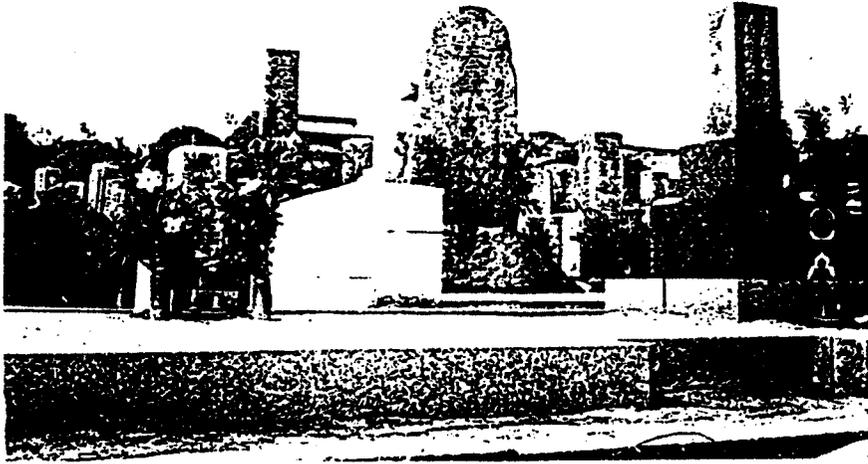
海水が市村平野に満ちていた頃は、蛇山のごときはやとその背稜を出していたにすぎず、従って詩意の対象とはならず、その他の理由もくわえてかく断ずることは、誤りではないと信ずる。

早稲田大学教授西村博士の説によれば、室察時代には、日本文化の中心地たる大和国河内地方には立派な市が散在していたが、地方にもそれぞれ市があつて相當な繁盛をみたものらしいが、わが深津市は備後における市場として有名であるが、書寫記を通して次の事が伺われるとしておられる。

- (一) 備後に深津市という盛り場があつて、布や綿や馬が交易されていたこと
- (二) 交易が物品との交換によつて行われたこと
- (三) 讃岐のような遠方の人もそこに來ていたこと
- (四) 十二月下旬に正月の入用品を求めるといふような風習のあつたこと



お婆捨山と経塚



市村内藏王山の東三味原字道々の小丘なり、弘法大師

一石一字の経を納め給ひし所なりと、其結構は約一反

歩程の石を積みてあり、大なる石にあらず、其の石を

踏むも崩るゝことなし、其下を覗ふに穴あり之れを

千人壺と云ふて行倒れ者の死體を投げこみたるどころ

にして、此の穴に死體を捨置くも鷹、鳥、犬、狼等

の瞰く事なし、骸骨夥しくありと、備陽六郡誌に見ゆ。

幸靈池に続く小山をお婆捨山という。

その昔、四国地方より舟で六十才以上の老婆を
捨てに来たが、後世に三つてその供養をなす

為に経を埋めて、経

塚なるものが出来た。

現在の墓場の中央にある。

時代は、奈良朝時代以前のことか。

水野勝成公時代から現在の経塚の体をなした。

浄土真宗

経塚山 慶満寺

又此の所に庵あり、何頃より設けたるや文徴に由

なきも明和年代に旅僧の來り住みたるものらしく、天

保の比僧長林、元治、慶應の比僧淨念住み居りしと

其後庵室大破明治十年再建今日に及ぶ。

(深安郡初創五周年)

●慶満寺

第一世住職 慶信法師

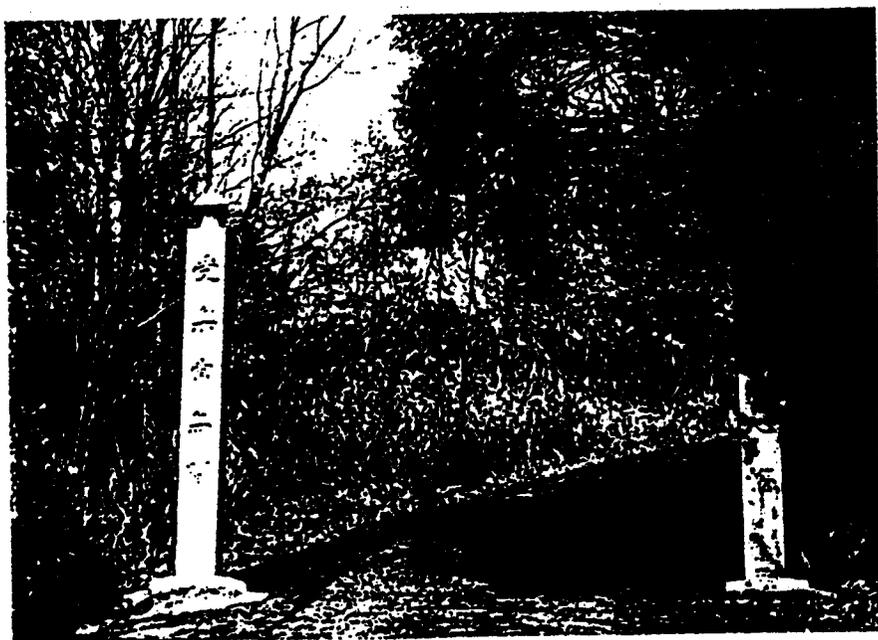
(大正六年二月二十日歿六〇)

第二世住職 教照院釋平忠法師

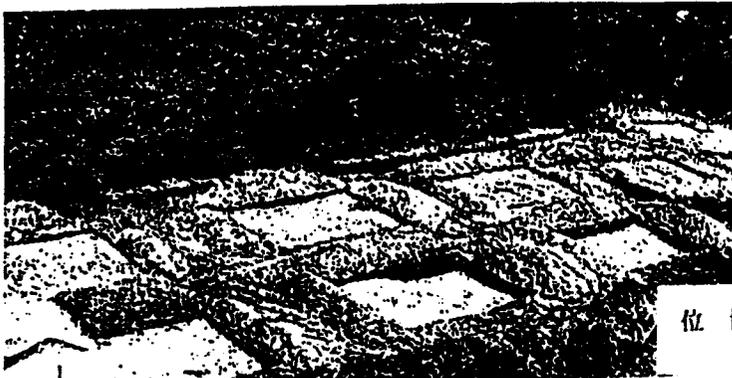
(昭和三十一年三月廿五日歿七五)

第三世住職 徳満院釋教法法師

(平成六年八月廿日歿八五六)



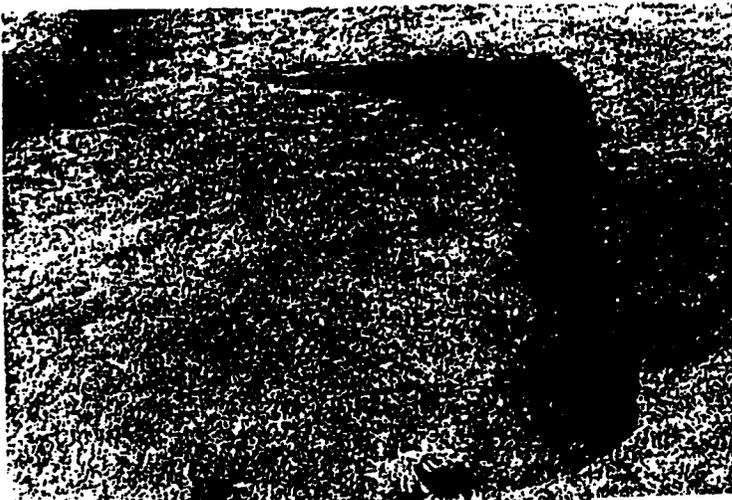
ナメラ遺跡



位置と環境

ナメラ遺跡・岩田遺跡は深安郡神辺町大字川南字岩田に所在している。両遺跡の位置及び環境については、ゴルフ場造成予定地内にかかる遺跡として1973年に事前に調査され、報告されているが、今回調査した遺跡はゴルフ場造成予定地の南西端にあつてゐる。

ナメラ遺跡全景



ナメラ遺跡住居跡全景



第1図 ナメラ遺跡・岩田遺跡位置図

1. ナメラ遺跡
2. 岩田遺跡
3. 草木遺跡
4. 丹波遺跡
5. 亀山遺跡
6. 大宮遺跡
7. 楠瀬遺跡
8. 大迫遺跡

孝靈天皇と築地ヶ内

人皇第七代孝靈天皇が吉備の^{路後}なる備後國に御玉趾を印し玉ふたことありや否やは、關史の表面では全く判斷出來ぬが、庶品郡栗生村大字栗柄に天皇の御陵真傳説地並に天皇を祭祀する南宮神社があり、深安郡市村に天皇の御座所と傳ふる築地ヶ内や王子原、又當時の池なりといふ孝靈池等があり、殊に上古に於て栗柄は藍田、品治地方の中樞開發地で、市村は安那深津地方の人類栖息の先驅地であつた證據歴々たるものあり、土地の位置形状、周圍の史跡、社寺の由緒等より推しても、京創蒙昧の當時、或は孝靈天皇の龍駕を迎へたこと有りやは、一概に之を否定することの出來難い程古い香がする、夫れは孝靈天皇と皇子吉備津彦命と又吉備津彦命と此地方との關係を稽ふる時、孝靈天皇と此地方との縁故が決して薄くないことを考定し得るからである。

孝靈天皇は大日本根子彦太瓊尊と稱し、父は孝安天皇、母は押媛皇后である、由來我國の歴史は第二代綏靖天皇から第九代開化天皇まで、殆んど御事績を缺いて居るので、關史時代として取扱はれて居る程國史不明の時代である、ところが古事記には非常に有力視すべき史實の記載がある、日本書紀には載つて居らぬが、我等は古事記の記事を信じたい、否斷じて借用してよいことを孝靈天皇の備後に於ける遺跡によつて明言したいのである、夫れは日本書紀の崇神天皇の條に、
十年九月、大彥命を以て北陸に遣はし、武甕川別を東海に遣はし、吉備津彦を西道に遣はし、丹波道主命を丹波に遣はし、因て詔して曰く、
教を受けぬ者有らば乃ち兵を擧げて之を伐て、
既にして共に印綬を授けて將軍と爲す、云々
十一年夏四月、四道將軍夜爽を平ぐるの狀を以て奏す、是儀異俗多く歸し國內安寧なり
とある四道將軍の事蹟中、吉備津彦命の件を以て古事記は孝靈天皇の條に繋いで居ることである。



千塚



岩が真つ二つに
箱根町には金太郎と山
姥が住んでいたという
「宿り石」、金太郎がけ

つたという「蹴落(けお
とし)石」、お手玉にし
て遊んだという「手まり
石」がある。
宿り石は高さ七段、奥

金太郎の親子が住ん
でいたという伝説が
ある「宿り石」は神
奈川県箱根町

したという逸話もある。
箱根町教育長勝俣孝正
さん(左)は「本当は岩に
生えている木の根が凍結
して岩に食い込み割れた
らしい」と説明する。

行き約八分ある。岩の下
の洞くつのような場所に
金太郎親子が住んでいた
といわれている。その岩
が昭和六年二月二十四
日、真つ二つに割れ、地
区民は金太郎の霊のた
りと恐れた。それをきつ
かけに明治末期からやめ
ていた「金時祭」を復活

●千塚 蔵王から千田に通じる192号バイパスをい
に衣池(蔵王分)千塚池(千田分)のあたりから東方
の天神山の麓にはその昔多くの塚があつて
千塚と呼ばれてゐた。その多くは土地の人
たちにより掘壊され、中国農業試験場用地の
造成に掘り起され残存はいくはくも残つて
いない。当時あつた塚の大きさは巾60cm、
奥行270cm 大きなものは巾270cm、奥行360cm
余のものがあつた。左右、天井90cm四方・
あるいは90cmと150cmの大きな石があり、天
井のこの大石をどんな方法で渡したものが
老人の力の恐ろしく強かつたことが思われる。
備陽大郡誌はこれに「古人穴居の跡である」
といつてゐる。神代では穴居生活をしてゐ
り、天照大神の御時すでに宮室の構えがあ
つたとみられる。

日本書紀卷第三、神武天皇の詔にも「巢に
棲み穴に住みて、習俗樵窟(しむくくわ)とな
りたり」とあるので人皇の初めでも穴居とは
石穴に住まいして風雨を避けていたのではあ
らう。ある人は、往古死人を葬つたところ
けれど、石窟から人骨が出たことがなく、筵
(むしろ)5、6席をしく広さといひ親をこの居所
の境があつたと思われることから、上古穴
居していた時の住みかであると言つてゐる。
その入口が南向きであるのも、寒い北風を
避けるためである。(北面してゐるものも)

【天神社】

素盞鳴尊を祭る小社で、祭神は菅原道真ではない。

従って『てんじんしゃ』ではなく、『てんしんしゃ』である。

元禄（1688～1704年）の頃までは、天神山山頂の鳥帽子岩のところに本社があったが、ある祭礼の日に喧嘩があり、社殿に血が流れたので、新しく造営しようと今の平地に移した。

この時、社人と社僧が祝詞について争いがあったため本社を造営しなかったもので、仮殿のまま今日に至った。

1773年の春から秋にかけて「エキリ」が流行し、村人が天神社に祈禱したところ誰も患わなかったので、小さい鳥居を建立した。



【蔵王山下城】

坂本墓地内に1434年3月28日に没した蔵王山下城主小川大膳亮の墓がある。「備後古城記」によると小川大膳亮は、備中大下村高田河内守正重の家臣とある。城跡は現存しておらず、その位置や規模は定かではないが、蔵王山の南麓の余り低くない所と推測される。

又、規模も天守閣や櫓を有する城ではなく、簡単な豪族の居館と思われる。石高は400石で当時の家老格にあたり、高田の勢力範囲の一鎮台として市村を守護していたもので、高田河内守の滅亡後は小川大膳亮も市村を去り、一代で終わったと伝えられている。

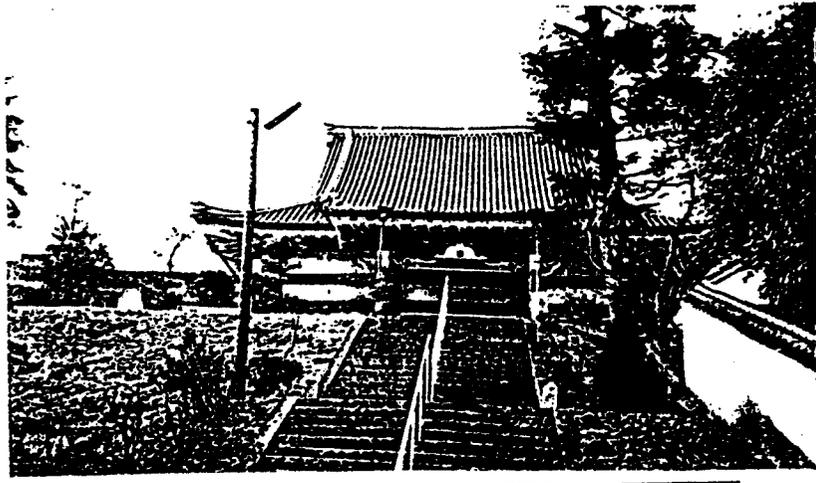
真光寺

浄土真宗

海岳山真光寺

由緒 宝光寺は大同元丙戌年（紀一四六六）最澄法師の創建にして備後国の一宮芦田郡宮内村吉備津彦神社の別当たり。寺領三百七十五石、元天台宗にて代々相統す、厥後下総国結城箱田次郎三郎季実なるもの当国に來り出家して円明と名づけ当寺に住持す、真応の頃相州最光寺の住にして当国光照寺開基明光勇良茲に稱依し寺を真宗に改む。即ち宝光寺真宗改宗の祖なり、

山南村宝光寺の末寺なり。



仁伍貝塚

この宮の前より西に向かつて少し行くと、仁伍という地に出ます。「仁伍」という地名は、引野、木之庄、駅家などにも見られ、伍は奈良時代に地方に置かれた軍隊組織のことで、一伍は兵五名をもつて構成され、その伍が二つあったことから、地名となつたと想われます。この墓王の仁伍からは、貝塚が発見されています。今は、瀬路松原により、この貝塚を見ることはできませんが、この地の貝と同じものが半田にも発見されており、早くからこの地に住民の集居があったことを物語るしています。

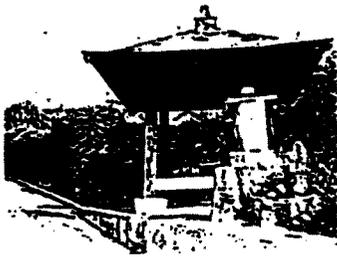


『福山志料』によると901年、菅原道真が船で九州に左遷される時に、立ち寄り松に寄りかかり、深津嶋山を眺めて都をしのんだといわれる和歌が残っている。

『露しぐれ 涙に袖は ひちにけり 都のことを 思い出づれば』

又、石に座り松に寄りかかって、深津嶋山を眺める直筆の自画像が、医王寺にあったが、盗まれて行方知れずといわれている。

辻堂



福山市内に現存する辻堂は約160ヶ所であり、殿三には、仁匠辻堂・加屋堂の2ヶ所が残っているが、江戸時代中期の『備後六郡誌』（宮原直樹1776年没）によると、帯村の辻堂は9ヶ所と記述されている。

辻堂の分布状況は、市内北部の山野・駅家・芦田及び南西部の金江・坂江・熊野に多くみられる。

一方、旧市内・瀬及び福山海など江戸時代に干拓された所では、川口の茶堂・手袋の地藏堂を除けば全く所在しない。

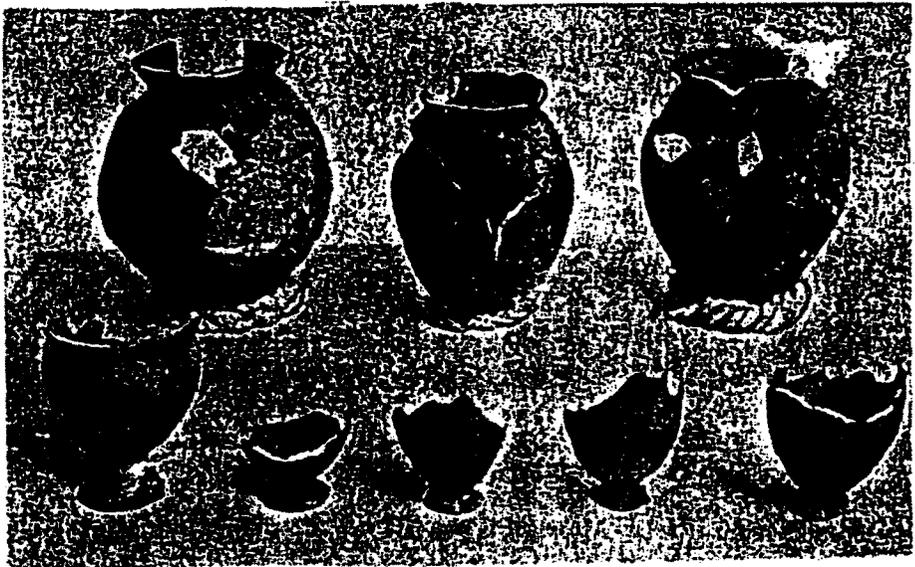
辻堂の置かれている場所は、かつての主要道路沿いとりわけ峠の頂上・坂道のふもと・四角や村境に多くみられる。

建物は通例、一間四方・四本柱吹き放しで、堂の中には石または木造の像が崇られており最も多いのが地藏尊で、次に「お大師さん」・観音像・薬師像・阿弥陀像と続いている。

サルトロロード

また、「利寺文相中貞観十四年（八七二年）三月九日付には、「備後深津地九十五町、浜六町、山八十九町」とあり、現在の深津と殿王一帯に、「利寺の荘園があつたことがわかりませ。この文書に出てくる浜は、現在の中国農業試験場東側一帯にあたり、この浜では製塩が行なわれました。瀬戸内海は気候温暖で雨が少ないことから、古くから製塩が盛んに行なわれ、その遺跡は多く発見されています。水野氏時代寛文年（一六六一〜一六七三年）頃、本庄頼政によって松永塩田ができ上がったことは、みなさんもよくご存知のところでしょう。

この浜の塩は、「しよたれ道」と呼ばれる山道を辿って宮の前すなわち海蔵寺の港まで運ばれました。この道は、「しよたれ道」とも呼ばれ、塩を背中に負



古代の製塩具と考えられる師楽式土器

つて坂道を登る際に、塩が垂れ落ちたことからこの名称がつけられたようです。

塩



金毘羅

信仰



蔵王町上井手川のほとり、日た。

野薬局と坂本商店の間に大きな常夜燈が一基ある。以前は反対側の川のほとりにあったが、この常夜燈には、「象頭山遙拝所・天保三年壬辰七月」と刻まれている。

象頭山とは、讃岐の金毘羅大権現が祀られている山の名である。近世以来、海上交通が盛んになるにつれて海難も多くなってきた。そんな中で、海岸から三里も奥にある象頭山は航海上の目標とされ、また山の前にある多度津は潮待ちの港として昔から栄えていた。そして、航海中この山に向かって祈りを捧げ、海難を救われたという靈験記が伝播されたこともあり、多くの人々の信仰を受けるようになった。

享保年間（一七二一—一七三〇）には全国から多くの大名が

代参を遣わすようになり、備後福山からも阿部正倫が燈籠を奉納している。このことは、各地

の領民の信仰・参詣にも多大な影響を与え、福山地方でも金毘羅詣の船が出るようになる。

これらの事情は、上屋家日記の文化十三年（一八一六年）の

項に「八月二十八日晴天、金毘羅社月参当月分は深津村へ相当り、清八船にて同夜出帆彌惣太

（上屋氏）参詣致す……四人連れにて二十九日八ツ時分（午後

二時）多度津へ着船す」とあり、また、菅茶山茗の備後国福山領風俗問状にも参詣の事が述べられている。

福山周辺を歩いていると、金毘羅大権現と刻まれた巨大な常夜燈を目にすることがある。

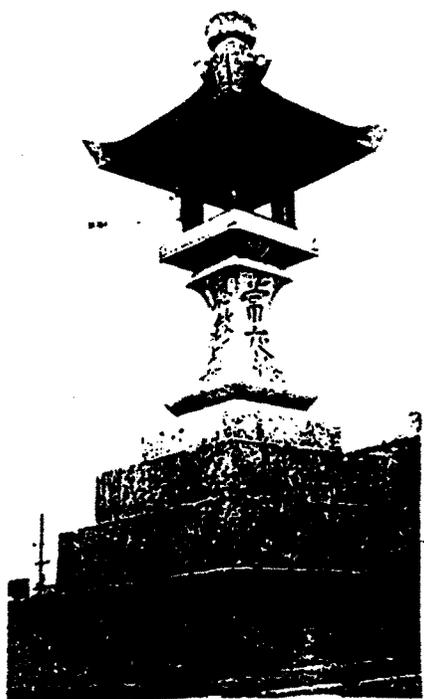
金毘羅さんといえは、海で働く人々の間で航海の神として信仰され、漁民の間では古くより竜神として信仰されていた。しかし、今、福山周辺にある常夜燈は、およそ海とは縁の遠い山裾や平地に建てられている。

そもそも金毘羅とは、梵語（古代インド語）の「クンビーラ」の音訳で、ガンジス川に棲む鱈の神格化された神で、インドでは仏法の守護とされていた。仏教が中国から日本に渡る過程で、

金毘羅は龍蛇であるとされ、平安時代以来の神仏習合思想によ

り、次には大國主命と同一視されるようにもなった。そのため、山の神、水の神、田の神として竜王存在すとして大権現号を用いるようになり、田の畔、池の畔、川の畔に祀られるようになる。

この内、蔵王町鍋蓋にある常夜燈は、文化十三年（一八一六年）丙子春正月に、深津郡中右志によって建立されている。この建立について、蔵王町土屋大作氏蔵の土屋日記（福山市重文）にそのことが記されている。



市村のもやい石

市村(蔵王)沖が干拓されたのは、水野美作守勝重(後の勝俊)が、国元総奉行・神谷治部、小場兵左衛門兩名に宛てた寛永二十年(一六四三年)正月九日の書状に記されており、この時、東の引野高崎より西の深津浜にわたる堤防が築かれ、完成した。

元和五年(一六二九年)、水野勝成は西園鎮衛として備後神辺城に入るべく柄に着き、続いて深津湾に船を進め、市村つなぎに船をつけて、ここより上陸し、神辺に向かった。ここが船をつなぎ港でなくなるのは、市村新田の造成(寛永十九年・一六四二年)以後で、現在でもこの地には「もやい石」が残されている。今の「もやい石」は復元されたものといわれるが、「舫」とは船と船をつなぐことをいい、この石があった所がかつて港であったことを物語るものである。



惣戸神社

そもそも三島大明神とは、愛媛県越智郡宮浦町に鎮座する大山祇神社のことで、この社は仁徳天皇の御宇、百済国より渡來し、摂津国三島に坐し、後現在地に遷し祀つたもので、和多志大神(渡大神)ともいわれ、古來より海上守護神として信仰され、後また農業神、武神として上下の崇仰はなほ大なる神であつた。

あつた。

この地方にも津之郷町夕倉地区に三島大明神があり、これと同じ音で深津と綱木の境に惣戸神社がある。この2ヶ所とも古くは船着場で、出入りする船の海上守護神として祀られた。

現在、福山周辺の惣堂、三島は、津之郷、蔵王、大門いずれも同神で、水野氏干拓以前はすべて海辺である。しかし、干拓により海が農地となつてからは農業神として祀られるようになった。

水呑町の山の神に山の神さん

がある。祭神は三島さんと同じ大山祇神であるが、干拓により陸地化してからは農業神となり、祭りの神輿の上に稲穂を結んで巡幸している。

このように民俗信仰は、流行神的要素が多分にあり、元來の神の効用により信仰されていて、客観状勢の変化や人間の欲求の変化によつて必要性がなくなると、次第に忘れられていき、その祠は消滅して行く。古書に多く見える神々も、今は既になくなつたものが多くある。

備陽史探訪の会事務局

福山市多治米町5-19-8

☎0849-53-6157

資料作成 柿本光明

